

軍人さんのお墓を通して見た戦争

—旧真田山陸軍墓地、瓜破霊園、旧呉海軍墓地を調べて—

55期生

I テーマ設定の理由

前回、奈良県15ヶ所の旧村にひっそりと残る軍人さんの墓碑文より戦争について調べ、いっそう興味を持ったので、今度は他の地域の大墓地について調べてみたいと思った。

II 研究方法

1. 現地調査 新聞やテレビなどで知った旧呉海軍墓地、旧真田山陸軍墓地、都会の大霊園として知られる瓜破霊園で軍人さんの墓碑をさがし碑文を読み取る。
2. 聞き取り調査（元海軍軍人、墓地管理人、軍人墓地に墓参に来た人、石材店の人）
3. 貴重な歴史遺産である陸軍墓地の保存を訴える「旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」が現地説明会を開くことを新聞で知り、参加した（2003年5月18日）。

III 研究内容

1. 旧真田山陸軍墓地 所在地：大阪市天王寺区玉造本町

明治4年、兵部省（陸軍の前身）が開設した日本で最初の、かつ現存する最大の陸軍墓地。区画ごとに同じ大きさ（軍隊の階級によりサイズが決められていた）の墓碑が整然と並んでいた。そこで、墓碑の数を数え、およその位置を図にしてみた（図1）。

(1) 明治期の墓

約5000の墓の大半は明治期の墓であった。西南戦争は明治十年鹿児島縣賊徒征討の役、出身地も兵庫縣淡路国、山口縣長門国などと記されている。軍役夫、千早丸舵取、土佐丸火夫、看病人、臺灣總督府雇員、臺灣民政局長通訳官など、軍隊の中でもいろいろな仕事をする人のいたことがわかる。日清戦争時の軍役夫の墓934基の区画は一段と低い所にある。軍隊の階級と関係があるらしい。日露戦争の合葬墓が階級別に4基あり、明治三十七、八年戦役と刻まれている。

(2) 昭和期の墓

・満州事変戦病疫将兵合葬碑が



1基。

昭和初期、「名誉の戦死」の遺族の要望で、国ではなく遺族が建立した個人墓20数基。家の姓が刻まれた台座があるため、他の墓石よりも背が高く見分けやすい。他の墓地ではほとんど見られなかった満州事変前後のものも多く、建立者名、出身地、戦歴が、「昭和七年六月七日満州奉天省ニ於テ匪賊討伐ニ従軍激戦



整然と並ぶ真田山陸軍墓地の墓碑

中、胸部頭部ニ槍創ヲ受ケ戦死」「昭和八年一月三日朝鮮平安北道ニ於テ、戦友ト共ニ戦利品運搬中戦死」などと詳しく記されていた。

昭和23年、南河内郡野田村が近隣町村と合併する際、最後に村費で建立した野田村遺族会の墓169基。軍隊の階級にかかわらず、墓石の大きさは皆同じであった。

(3) 概観…日清戦争(戦没者13,249人)の墓1300余に対し、日露戦争(戦没者87,983人)の墓が400余しかない。その上、戦没者が桁違いに増えた昭和期に国の建立した個人墓がないのはなぜか。以下は「保存を考える会」の人たちから聞いた話である。

西南戦争までの墓碑には、兵士の出身地や戦歴、死因なども詳しく刻まれているが、日清戦争では階級、氏名、死亡場所、年月日のみ。日露戦争になると当初建立されていた個人墓は途中で中止され、戦後、階級別の合葬墓4基が建立されたが戦没者名は彫りこまれなかった。満州事変では合葬墓1基建立され、日中戦争が本格的に進行した昭和12年以降、陸軍は個人墓を一切建碑せず、小さな骨壺を納骨堂に集めた。

墓地の創設者はこれだけの広さがあれば100年はもつと思っていたのだろうが、その後の戦争で想像を絶する犠牲者がでたため、個人墓では間に合わなくなったのと、墓地の面積縮小を可能にする合葬墓は慰霊のモニュメントとしての機能も果たしたのではないかと、とのことだった。

2. 瓜破霊園 所在地：大阪市平野区瓜破

昭和15年開設の市設霊園。11区画あり墓数16,000余。軍人墓地ではないので墓石の形(てっぺんが四角錐)をたよりに軍人さんの墓をさがしだし、各区画ごとにデータをまとめた。全データ数690。

開設当初分譲された区画1では軍人さんの墓が、読み取り可能なだけでも318基もあったが、新墓地といわれる区画7~11は合計しても74基であった。

特に区画1で、日中戦争初期の中国での戦没者の墓には入隊日から隊の名前、戦歴、死因などが何行にもわたって詳しく記されているものが多くあったが、昭和19年以降、長い碑文の墓はめっきり少なくなり、戦没場所と日時のみのもものがほとんどだった。戦争が長期化し、激しくなるにつれて日本へ届く戦没者の情報が少なくなっていくたり墓石建設が追いつかなかったのではないかと考えた。

3. 全データ(瓜破、真田山(昭和期)、前回の奈良県香芝市、広陵町)について戦没場所と戦没時期について表1にまとめた。

(1) 戦没場所別戦没者数

中国(480)、フィリピン(171)、ニューギニア(86)が多かった。厚生省援護局調べによれば、戦没者は中国(46万余)よりフィリピン(51万余)の方が多く、私の結果(特に大阪に限れば、中国は394で、115のフィリピンの3倍以上)とは違っていた。昭和15年開設の瓜破霊園に日中戦争の戦没者の墓が集中したことは想像できる。が、やはりこの地域からはフィリピンよりも中国へ出征していった兵士が多かったのではないだろうか。

表1より、フィリピンは多くの戦没者をだしているが、昭和18年は0である。昭和17年に日本軍がマニラを占領してから、19年に米軍がレイテに戻ってくるまで、抗日人民軍の抵抗は激しかっただろうが、地域性もあるだろう。

(2) 陸軍と海軍

判別可能なデータでは、陸軍1029、海軍124であった。海軍の戦没者の割合は、日清戦争で2%、日露戦争では5%だったという。今回の昭和期のものは10.8%で、時代が下るにつれて海軍の割合が増えている。兵力増強、戦線拡大とともに海軍兵士の数も出番も増えたためと考えられる。

(3) 戦病死者

昭和期の全データ1185中、戦病死と記されていたものは90で7.6%であった。戦没、陣没と記されているものの中にも戦病死者が含まれている可能性があるため、実際の戦病死者数はもっと多かったと思われる。西南戦争では帰還中のコレラの蔓延で多数の死者が出、脚気の犠牲者の多かった日清戦争の戦病死者の割合は86%、日露戦争では27%だったという。

4. 旧呉海軍墓地 所在地：広島県呉市(現在は呉市が長迫公園として維持管理)

明治23年、海軍軍人などの埋葬地として開設、海に見える見晴らしのよい高台にあり、各艦艇、各隊ごとの大きな合祀碑(80余)が立ち並び、個人墓(160基)は明治期のものしか見あたらなかった。今もなお、有志による合祀碑の建立が相次いで計画されている。

表1 戦没場所別、時期別戦没者数(全データ)

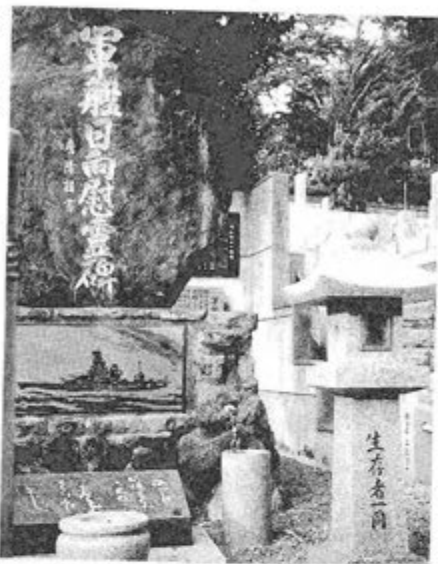
戦没場所	満州事変		日露戦争	真珠湾攻撃				不明	計	
	1/1	1/1		S18 1/1	S19 1/1	S20 1/1	S20 8/15			
日本本土(含東シナ海)	2	3	8		4	10	16	5	1	49
千島					1					1
小笠原諸島(硫黄島等)						2	7			9
沖縄					2	22				24
台湾				1		8	2			11
朝鮮	1	3	2		1	3	3	2		15
満州	1	12	21	3	1	2	5	12		57
中国(含黄海)	2	1	310	40	10	42	32	31	12	480
香港				1					1	2
蒙古			2				1	2		5
シベリア(ソ連)							2	11		13
太平洋						2				2
アッツ島、キスカ島						1	27			28
マリアナ諸島						1	3			4
カロリン諸島						1				1
ギルバート諸島						1				1
ビスマルク諸島(パウル)						2	3	1		6
パラオ・ペリリュー						1				1
ミッドウェー						10	9	14	4	1
ソロモン諸島						2	4	7	2	15
その他(南方洋)						12	21	39	12	2
ニューギニア						1	1	2		4
大スンダ・小スンダ列島			1							3
ボルネオ								1		2
セレベス								2		2
フィリピン				29		16	112	7	7	171
南シナ海			1		1	2				4
マレー半島						1	1			2
タイ								1	2	3
ビルマ				1	2	29	23		1	56
インド				1		15	1		1	18
アンダマン・ニコバル									1	1
戦没場所不明	2		13	5	6	16	28	7	38	115
計	8	19	358	110	67	245	276	81	64	1228

S6 S12 S16 S18 S19 S20 S20
9/16 7/17 12/8 1/1 1/1 1/1 8/15

合祀碑の裏面などに戦歴や出身県別の戦没者名などが刻まれていた。私は出身地と出征先の関係について興味があったので、各艦艇の戦没者数を出身県別に数えて表にしてみた(表2)。

(1) 都道府県別戦没者数

軽巡洋艦大井の碑に呉鎮守府管轄として、愛知、岐阜、三重、和歌山、奈良、大阪、兵庫、岡山、広島、鳥取、島根、山口が挙げられていたが表にしてみると、これらの県出身者の戦没者数が多いことは一目瞭然であった。ただ、航空母艦信濃だけは他と違い、東日本出身者が多く、横須賀を母港とする艦ではないかと思う。近畿地方でも、京都と滋賀は舞鶴鎮守府、呉とは海をへだてているだけの四国は佐世保鎮守府の管轄だったのでと想像される。



軍艦日向の姿が彫り込まれている

(2) 沈没後の生存者

沈没時、駆逐艦に救助された人も数多くいるが、乗艦を失った生存者達は、その後、陸戦隊となり、比島陸上戦に転戦した人は、そのほとんどが戦死している。

重巡洋艦鈴谷の碑文より — 昭和19年10月25日10時30分頃、撃墜した米空母機が魚雷甲板舷側にて爆発炎上し、搭載魚雷の誘爆によりサマル島東方太平洋上に、600余名の乗員と共に13時22分、その姿を海中に没す。駆逐艦沖波に救助された400余名も翌26日の米空母機の追撃により、沖波は損傷、多数の死傷者を出したがマニラに帰着し、更に半数は陸戦隊としてマニラに残留し、又、本国へ帰った者もそれぞれ苛酷な戦に、終戦迄に大多数が護国の花と散った。 —

鈴谷の碑の横にもう1つ小さな碑があり、次のように刻まれている。 — 昭和19年10月26日、鈴谷乗員救助後、マニラ帰投中、米機の追撃を受け、死闘して斃れた沖波乗員戦死者の霊に捧ぐ。 —

同じく重巡洋艦の熊野は沈没まで498、比島陸上戦490、最上はミッドウェー93、ラバウル21、比島沖349、航行不能となり雷撃処分後、ルソン方面陸戦417の戦死者をだす。

幾多の海戦に参加し、沖縄海上特攻作戦の後も生き残った「武勲の幸運艦」駆逐艦雪風は、何度味方の艦艇の沈没を目のあたりにし、生存者救出に奔走したことだろう。

(3) 大破、沈没した時期と場所

艦の戦歴を見ると、昭和16年頃までの艦の行き先は、ほとんど上海、杭州湾であり、ついでフランス領インドシナ、マレー半島へと南下している。この時期に沈没したものは見あたらない。昭和16年になるとグアム島、ウェーク島、ハワイなど太平洋へと行動範囲が広がり、昭和17年以降続いた大きな海戦では多くの艦が沈没し、多数の戦没者が出ている。また、ソロモン海域の海戦の後、昭和17年11月頃よりソロモン海域の輸送作戦や船団護衛中に攻撃を受けるものが多発している。昭和19年になると、八丈島南方(山彦丸)、釧路沖(白雲)、台湾海峡(浦風)、潮岬沖(信濃)、那覇南東(伊号第8潜水艦)など日本近海で攻撃を受けるものがでてくる。昭

表2 各艦艇の出身県別戦没者数
①②は戦艦、③は航空母艦、④潜水母艦、⑤重巡洋艦、⑥軽巡洋艦、⑦駆逐艦

艦名	沈没年月(昭和)	都道府県	場所	北	東	南	西	中	計																																												
①大和	19.10	比島	沖						35																																												
②扶桑	20.4	沖繩	海上						2788																																												
③扶桑	19.10	比島	沖						1641																																												
④信濃	19.11	比島	沖						790																																												
⑤長門	20.7	若狭	海						106																																												
⑥古鷹	17.10	ルソン	海						206																																												
⑦熊野	19.11	ルソン	島						888																																												
⑧鈴谷	19.10	比島	沖						126778																																												
⑨三隈	17.6	ミッドウェー							700																																												
⑩大井	19.10	比島	沖						110																																												
⑪大井	21.11	長崎にて解体							10																																												
⑫大井	19.7	マニラ西方							153																																												
⑬谷風	19.6	北ボルネオ沖							161																																												
⑭浦風	19.11	台湾海峡	2						310																																												
⑮浦風	20.4	沖繩海上							110																																												
⑯浦風	20.4	沖繩海上							50																																												
⑰雪風	22.7	船橋として、中国(台湾)に引渡し							5																																												
⑱雪風	17.2	マカッサル							10																																												
⑲早潮	17.11	ニューギニア							52																																												
⑳黒潮	18.5	コロンバンガラ							91																																												
㉑黒潮	18.5	コロンバンガラ							82																																												
㉒浦波	19.10	比島	沖						102																																												
㉓初風	18.11	プーゲンビル							264																																												
㉔陽炎	18.5	コロンバンガラ							21																																												
㉕長竹	19.12	バシー海峡							71																																												
第544航空隊	20.8	日本海							120																																												
第544航空隊	19.12	東シナ海	山田山列島(健康していた航空母艦艦隊が沈没)						379																																												
第16防空隊									188																																												
計				98	27	52	44	47	17	64	64	168	87	68	61	66	48	21	98	36	81	16	19	23	7	31	108	15	62	152	268	563	105	800	37	24	4	75	794	36	42	60	35	24	11	10	7	18	10	105	11	150	1032

和20年4月の沖縄海上特攻作戦以後は、石川県沖（伊号第122潜水艦）、若狭湾（長鯨）、宮津湾（初霜）、八戸（稲木）、日本海（第82号海防艦）など本土周辺で攻撃を受け、大破、沈没したものばかりだった。いくつかの大きな海戦の後、日本が洋上の戦力を失い、連合国側の攻撃の包囲網が本土に迫っていたのがわかる。

(4) 約850人中10人しか戦死者を出さなかった軽巡洋艦鹿島の元乗員の人の話

呉の近くの安浦町に住み、自分が今生きていることに感謝し、ほとんど毎日、海軍墓地に足を運ぶというこの人に鹿島が何度も危険をくぐりぬけた話を聞いた。

台湾、沖縄間航行時は魚雷が艦の真下を通過し、上海沖舟山諸島の定海は、鹿島出港8時間後、敵機150機の来襲を受け、釜山、舞鶴間のタングステン輸送時（昭和20年になると物資の輸送も商船ではできなくなっていた）舞鶴出港7時間後に舞鶴大空襲があった。戦争末期の1～2カ月、迷彩して能登半島にいた。その間、母港の呉は米軍の空襲に遭っていた。鹿島は終戦を知って8月29日に呉帰港。

戦後、復員輸送船として12回（1回3000人）復員輸送を行った。ニューギニアには3回迎えに行ったが9割は栄養失調だった。ヤルート島（マーシャル諸島）では司令官が兵隊たちに農業をさせ、タバコも栽培し、自給自足の生活をし、皆栄養状態も良かった。が、この司令官は復員せず自決したそうだ。満州開拓団の避難民を迎えに行くと、女性はソ連兵の目から逃れるために断髪し、男のような恰好をしていた。

最後はマッカーサーの命令で昭和21年11月27日長崎にて解体。

呉海軍墓地には明治時代、山口県沖で海難事故に遭った英国船の水兵の墓があるが、戦後、英連邦軍が呉に進駐してきた時、この墓を見て、手厚く葬られているのに感激したという。私はそれまで、日本に進駐してきたのはマッカーサー率いる米軍だけだと思っていた。米英中心の占領は現在のイラクの姿と重なる気がする。

IV 感想・今後の課題

私の祖父も昭和14年、現役兵として呉海兵団に入団し、21年4月仙崎港へ復員してくるまで上海で従軍した。今、祖父の残したメモを見て、祖父が生きていたら聞きたいことがいっぱいある。上海港停泊の工作艦朝日の乗員だった祖父が上海海軍特別陸戦隊に入隊したのはなぜか。朝日の碑文によれば、この後、朝日は上海を離れ海南島からシンガポールへ向かい、17年5月米潜の魚雷を受け沈没している。15年8月、杭州湾に敵前上陸し、盲貫銃創を負った時の様子や、上海では、いつどのようにして終戦を知ったのか。

当時を知る人はますます少なくなってくる。一方、今回、「旧真田山陸軍墓地とその保存を考える会」のように国民の側から軍や戦争の歴史を調べる地道な努力をしている人々と出会うことができた。ロシアにも旧ソ連時代には真実が伝えられなかった張鼓峰事件や戦後の日本人の抑留など、過去の不幸な事実を知ろうとしている高校生のいることをテレビで知った。私も身近な戦争遺跡や、機会があれば海外の戦争記念館をたずねたり、戦争体験者の話を聞かせてもらったり、事実を知る小さな努力を続けたい。

V 参考文献

。板倉聖宣・重弘忠晴「日本の戦争の歴史」仮説社 1993 。福田誠・牧啓夫「海戦ガイド」新紀元社 1994 。海軍歴史保存会「日本海軍史第七巻」1995